

English Garden 第57話

"I've got to go on."

Laura Ingalls Wilder

「前に進むしかないんだわ」 ローラ・インガルス・ワイルダー

「インガルス一家の物語」のシリーズの8作目 "These Happy Golden Years" (「この楽しい日々」)の一節です。ローズ一家はあちこち点々としながらさまざまな苦勞を乗り越え、ようやくサウス・ダコタ州の町の中の家らしい家に住めるようになりました。「この楽しい日々」のローラは15歳、学校に通っていますが、突然、家から12マイルも離れた開拓地で2ヶ月間先生をしてほしいと頼まれました。成績がクラスでいつも1番のローラは簡単な教員試験にも無事パスし、開拓者で地区の教育委員であるブリュースターさんの家に下宿して、生徒を教えることになったのです。



とうさんはきのう寒い雪の道を馬車で送りながら、不安がいっぱいで沈みがちのローラに、"You have confidence in yourself, that is the only way to make other folks have confidence in you." (自信を持つことが、人の信頼を得るただ一つの道だ)などと励ましてくれました。今日はいよいよ第1日目です。ローラはとうさんの言葉を思い出し、"I dread to go on, and I would not go back." (前進するのは怖いけれど、後にはもどらない)と心に誓い、"I've got to go on." と大きな声を出して自分に言い聞かせるのでした。ローラの生き方には、常にこの積極的な姿勢が見られます。そのときローラは、実はお金も欲しかったのです。病気で失明して盲学校に通っている姉のメアリーの学資の足しにするためでした。

すきまだらけの農地小屋に集まっていた生徒は5人、みなローラより背が高く、年上の子もいました。いたずらしたり、意地悪したり、ふてくされたりする子もいましたが、ローラは相手の身になって考え、先生としての威厳を保つことも忘れずに、生徒の心をつかんでいきました。ローラが夜は自分の学校の勉強をしていることを知って、「ぼくも夜勉強をすればいいんだ」と気がついて、自分から宿題を増やす子も出てきたのです。

ローラはブリュースターさんの家に下宿して、自分の家のよさをしみじみと知りました。ローラの部屋は凍えるほど寒い上に、ベッドは動くし落ちそうなせまい寝椅子です。それに奥さんはいつも不機嫌でろくに口もきいてくれません。西部の厳しい生活がいやでたまらず、東部に帰りたくて当たり散らしているのです。下宿人を置くのも気に入らないのでした。だからローラは、どんなに寒くても学校に出かけるとほっとしていました。

ローラの救いは、週末には家に帰れることでした。でも、最初の金曜日は吹雪になり、とうさんの年寄りの馬には往復24キロの道は無理でした。しょげていると、教室に鈴の音が聞こえてきました。ローラの家近くに農場を持つワイルダーさんの若い馬の引くそりの鈴の音です。とうさんの代りに迎えにきてくれたのでした。

サウス・ダコタは緯度がほぼ北海道と同じくらいで、冬の寒さは東京では想像もつかないほどです。走る馬の息が鼻の上で凍るので、時どき降りて手で溶かしてやらないと、馬は呼吸ができなくなります。家に着いたときには長く馬を待たせないように、素早く降りてさよならしなければなりません。いちばん寒いときは零下40度、今日は暖かくなって気持ちがいいという日が零下15度です！ワイルダーさんはローラがブリュースター家でみじめな思いをしているのを察して、こうした寒さの中を毎週送り迎えしてくれたのです。そしてローラはこの話の終りに、ワイルダーさんと結婚することになりました。

最後に作者のローラ・インガルス・ワイルダーについて簡単に触れておきましょう。アルマンゾ・ワイルダーと結婚したローラは、農場がやっと軌道に乗りはじめた1911年、農家向けの週間新聞「ミズーリ・ルーラリスト」に記事を書きはじめ、16年間続けて中心的なコラムニストになりました。けれども次第に「何かのちのちまで残るものを書きたい」と思うようになり、そのころ作家としてすでに認められていた娘のローズ・ワイルダー・レインの勧めもあって、自分の子ども時代の話を書きはじめたのでした。こうしてローラの物語の中に、お話の名手だった父チャールズ・インガルスが炉端で子どもたちに語った数々の冒険物語やおもしろい逸話なども復元されたのです。最初の物語「大きな森の小さな家」が出版されたのは1932年、ローラが65歳のときでした。「インガルス一家の物語」はそれから次々と書き続けられ、世界じゅうの人びとに愛されるようになりました。